ミラレパのグルブムにおける婦人の問題

佐　藤　道　郎

序，基本的問題

チベットのヨーガ行者，ミラレパ（Mi la ras pa 1040-1123）は法系としては，ナーローパ，マルパの系統のカーギュッパに属し，専ら山中の洞窟の中で修禅していて，その田舎における教化の中で，婦人を相手とした場面が「十万歌謡」の中に出てくる。ここで出てくる場面は第十四章，ニャマ，ペータルブムと逢う章である。この章ではミラレパを除き婦人のみが登場し，婦人に対する接化とミラレパの宗教の根本的態度と実践方法が見出される。

ミラレパにおいて婦人の問題は特別に切り離されてあるのではなく，ミラレパの仏教の立場そのものもまたここに窺うことが出来る。訳文を附加しているが，そこに見られる基本的態度は次のように要約されよう。

1．仏法には男女の差別は存しない。

2．社会人，家庭人としても，僧形をとらなくとも実践出来る。

1．と2．とは人間そのもののあり方の相異を問題としていないから共通とも言えよう。然しこの仏法修行のためには，自己の現実の直視と，師について直接修行の指導を受けるという二つの具体的な方法が不可欠であり，そのためには，当時のチベットにあっても，女子の立場には困難が伴ったと見られる。そしてそれはこの章の中にも，一般庶民，家庭の婦人の生活の状況が描写されており，苛酷な自然の中での生産活動と社会生活の状況が具体的に述べられている。この俗世の苦悩と対比して，修行による安楽が強調されている。従って，時代と地域としての困難というのみでなく，人間の社会が，そもそも，根本的に虚假のものであるという見解をみる。この虚假のあり方は婦人の場合には婦人としての特有の虚しさがあって，それを老女の場合に描くようにかなりリアリスティックに示されている。

さて1．の仏法においては男女を選ばないということは歴史的に見れば単純ではない。インドにおける変成男子の思想，即ち女子は一度男子に生れ変ってから悟りを得る事が出来るという思想がインド社会にあったのでその影響を仏教もまた受けている。この見解を

示しているのが「法華経」であろう。

この考えをすべてにわたって検討するわけにはいかないが，日本仏教では浄土系の親鸞においても変成男子の項目は変化なく受けつがれ，疑問を挾むことはなかった。

これらに対してはっきりと原則的に反対の立場をとって変成男子の説を批判するのが曹洞門の祖とされる道元禅師である。

すなわち「正法眼藏」の礼拝得髓の巻に,「女人ナニノトガカアル，男子ナニノ徳力アル。悪人ハ男子モ悪人ナルアリ，善人ハ女人モ善人ナルアリ。聞法ヲネガイ出離ヲモトムルコト，カナラズシモ男子女人ニヨラズ。モシ未断惑ノトキハ，男子女人オナジク未断惑ナリ。断惑証理ノトキハ，男子女人，簡別サラニアラズ。又ナガク女人ヲミジト願セバ，衆生無辺誓願度ノトキモ，女人ヲバスツベキカ。捨テバ菩薩ニアラズ，仏慈悲ト云ハンヤ。」[1] とあり，更に「得法ノ女人世ニイデヽ，人天ノタメニ説法セントキモ，來リテキクベカラザルカ。モシ來リテキカズバ，菩薩ニアラズ，スナワチ外道ナリ。」[2] とあるところがそれである。この問題は道元禅師と当時の社会状況との関係においても考察すべき問題を含んでいるが，ここでは根本的立場の指摘に止める。

この立場と内容的にはミラレパは同一である。ミラレパには四人の女弟子があった。ここにあげられているペータルブムの話はその中の一つである。このペータルブムの話の全脈絡は老女，若女をして，菩提心を起さしめ，その器に応じた説法を簡明にし，直ちに修禅に入らしめて，その境地を確認しつつ，向上の一路に進ましめていることにある。特にミラレパは密教者であって，一般には，当時にあっても簡単に教義内容を開き示さず，順序はかなりの時間的経過において展開し，簡単に近づき得るようなものではなかった。密教の内容を祕し，師弟間の祕とすることは禅宗の室内の消息とも通うところがある。ミラレパは密教の内容を端的に歌で示して，弟子を指導していること，それは，女性の場合でも擇ぶところはなかった。対機として女性を特別に軽んじたり，やさしくしたりしたわけではない。チベットの仏教では特に今日のゲールグパやサキャパでは先ず顕教，即ち経と論の学問をしてから密教に入ることとなっているが，ミラレパやカーギュッパやニンマパでは直接に修禅に入る。こうしたすぐに修禅に入り得る教であることと，顕教という仏教学を学んでから仏教の修業に入るを要せず僧院仏教の形をとらなかったので，ミラレパは女人や俗人をもすばやく仏道に引き入れたと見られる。

特に密教にはインド密教以来，性ユガという女性のヨーガの対象，相伴者を必要とするものがあって，そのような事も男性本位的な修道体系であると見られる。性ユガをミラレパの伝記とこの十万歌謡でみる限り，行った形跡はない。ミラレパの跡をつぐヨーガ行者

1) 大正大藏圣，第82巻，P.36c．参照。
2) 同上 〃 P.37a．参照。

にも性ユガを行った事蹟は見当らない。何れにしてもミラレパにおいては，仏道を修行するのに男女の別は殆んど問題となっていなかった事と，そのミラレパの根本的立場を導入しやすくしたものはミラレパの仏教が寺院仏教，学問仏教，更には貴族の仏教で全くなく，ミラレパがカーギュッパの系統を引いていても，宗派的な立場ではなく，個として，仏教を山中で行い，宗派的な攻撃は受けても，宗派的規制は受けなかった事によると見てよかろう。

さて次にミラレパの指導において目につくのは，ここの場合に見られるように女性だからと言って，柔らかに表現し，耳に入りやすい指導はしていないことである。老女の現実の容姿，生活のみじめさ，起居の不自由さ，環境としての家族との厄介なことなど全く遠慮なく指摘されている。これは若い女性に対してもそうであって，この意味は俗世の中には信頼すべきもののないこと，それに依存すべきでなく，真理に貫ぬかれた仏教の生活に入るべきことを示している。その限り，女性特有の容姿や言葉，家族関係などにも，容赦なき現実の観察が見られる。ミラレパにはこの章にみられるように女性だからと言って特に親切に扱うということはない。

以上の様なミラレパの真理への指導において女性を差別することが，原理的にも方法的にも存せず，各人に応じた指導が与えられたとみてよいと思われる。このことは仏教史全体の中でも目立つことであり，チベットの仏教史の中でも特筆すべきことであると考えられる。というのは，大ていの場合には，このミラレパのようには殆んどの僧院においては仏法指導が行われなかったからである。

もう一つ，ミラレパの他の章にもよく見られる事であるが，チベットの中央の政権が崩れて，11世紀以降，ダライ五世の頃にダライ政権が出来るまでは，チベット社会は安定せず，盗賊や乞食，種々の宗教者の勢力争いがあった時期であって，それ故にまた，迷執の俗世を捨てるようにという教示を更に強くミラレパがしたとも思われる。女性がこのような立場においては特に俗世のしがらみで苦しんでいたと思われ，それを宗教者として救うことにミラレパはためらいはしなかった。

尚，ミラレパの歌の中には，女性や弟子の性的欲望を超えていく仕方も見られる。この章の中の最後のところの禅定の世界はそのような性の世界をこえていくものであろう。それについては別の諸篇を見る必要があるが，基本的には男女の性の問題の解決は仏教の禅定，証悟の世界において，日常の世界にいながら，この世界に染着しない，宇宙的な世界に生きることであると見られる。ミラレパの弟子の一人，レチュンの女性との関りの脱出は，ミラレパのかくされた指導によるが，しかしヨーガの実習，証悟の深化によったと見られる。女性の問題も究極的には，このように展望すべきと考えられる。

訳文，第14章　ペータルブムと逢う章[3)]

上師に帰命します。尊者ミラレパ御自身がチャンタゴ（byaṅ rta sgo）の雪中に修禅に赴こうとお考えになって，秋の季節になった時に，チュンのゲェパレスムにお著きになった。その時すべての村人達は刈入れをしていた。特にある大きな畑に，15歳程になった知慧の空行母の相をもった一人の女性が頭首をしている多くの人々が刈入れを一緒にしていた。そこにミラレパが到着した。そして施主達に「ヨーガ行者である私に生活の糧を乞う」とおっしゃった。その女が言うには「ヨーガ行者，あなたは向うの家の門に行っていて下さい。私もすぐに行きます」と言った。それで尊者はその家の門に到着して，その門を手杖で一撞きしたら，その門は内に開いた。その瞬間に，その内から美しくない服装をして，粉土を一杯握っている老女が現れて，「乞食のヨーガ行者よ，あなた達は夏の時季に乳製品（酪）を乞い，冬の季節に麥酒を乞う。お前には休む時間もない。お前は私の子女と嫁の諸々の飾りを盗もうと考えて，人が居ない時に，そっと来たのか」と言い，体をふるわせた，粉土を投げつける準備をし，大そう怒ったので，尊者は「老婆よ，お前が粉土を投げるまで，時間があるから，少し私ミラレパの歌を聞きなさい」とおっしゃって，九つの意味のある次の歌を述べられました。

上方，善趣は解脱の安楽が一つと，
下方，は三悪趣の苦が一つと，
中間にはどこに生れるか自らの自由を有たない人が三つで，
三つ，その三つと遭遇した時に，婆さんよ，法に忿怒し，悪心をもつ女よ，
お前は考えを省みて，自分の心を調べなさい。
行うならば，勝れた仏法を行いなさい。
依るならば，りっぱなラマに依りなさい。
お前が始めて，家で供養する時に，このようでなく，しっかりと心掛けて下さい。

朝，起きる前が一つと，
夜，寝た後が二つと，
終ってない仕事が三つと，
三つ，その三つと遭遇した時には，

3）このチベット原文は青海民族出版社の版で1981年の刊行であり，その pp.302—314であって，他の版と決定的に異るところは少い。校訂した版に基づいて後日研究刊行し全訳をすすめたい。この青海版は従来刊行の何れの版によるかは記されていない。尚，Garma C.C. Chang の二冊本の訳本：英訳もあるが，この章もかなり自由に訳されている。

婆さんよ，給金と食費のない女召使よ，
お前は考えを省みて，自分の心を調べなさい。
行うならば，最勝の仏法を行って下さい。依るならば，りっぱなラマに依りなさい。
それから，そのようにしっかり心掛けなさい。

意義重大な家長が一つで，
有ってなくとも必要な税金を集めておくのが二つで，
是非欲しい男子が三つで，
三つ，その三つと遭遇した時には，
婆さんよ，大事にされるのは少しで，自分に必要な福分のない女よ，
お前は考えを省みて，自分の心を調べなさい。行うならば，最勝の仏法を行いなさい。
依るならば，りっぱなラマに依りなさい。
彼に隨順し，そのようにしっかりと心掛けて下さい。

獲得する時，盗人がこっそり盗るのが一つで，
貰えないものを強奪する強盗が二つめで，死と怪我のない喧嘩が三つめで，
三つ，その三つと遭遇した時に，
婆さんよ，敵に本当に立上り，すぐ激怒する女よ，
お前は考えを省みて，自分の心を調べなさい。
行うならば，最勝の仏法を行いなさい。
依るならば，りっぱなラマに依りなさい。
彼に隨順して，そのようにしっかり心掛けて下さい。

人間の女子のおべっかは一つで，
自分の息子のことば汚く命令するのが二つで，
孫娘がすぐにいっぱいおしゃべりするのが三つで，
三つ，その三つに遭遇したら，
婆さんよ，がまんを実修し，軽々しく言葉を信用する人よ，
お前は考えを省みて，自分の心を調べなさい。
行うならば，最勝の仏法を行いなさい。
依るならば，りっぱなラマに依りなさい。
彼に隨順し，そのようにしっかりと心掛けて下さい。

縄で縛った杭を抜きとったような立ち上り方が一つと，
鳥のそっと逃げるような歩き方が二つと，
土袋の破れるような坐り方が三つと，
三つ，その三つと遭遇する時に，
婆さんよ，うつせみの衰えの傷心の女よ，
お前は考えを省みて，自分の心を調べなさい。
行うならば，最勝の仏法を行いなさい。
依るならば，りっぱなラマに依りなさい。
彼に隨順し，そのようにしっかり心掛けて下さい。

外は皮を集めたしわが一つと，
内に血肉がなくなった骨が放置されているのが二つで，
中間は馬鹿，唖，つんぼ，盲の迷乱が三つで，
三つ，その三つに遭遇した時に，
婆さんよ，見つともなさが現わな怒った時のしわのある女よ，
お前は考えを省みて，自分の心を調べなさい。
行うならば，最勝の仏法を行いなさい。
依るならば，りっぱなラマに依りなさい。
今，このように，しっかりと在るよう心掛けて下さい。

冷たくて，汚濁した飲食物が一つで，
重くて，ぼろの古着が二つで，
四つの樹皮をつなぎ合せた臥床が三つで，
三つ，その三つと遭遇する時には，
婆さんよ，人が踏みつけ，犬が跨いでいく得道の女よ，
お前は考えを省みて，自分の心を調べなさい。
行うならば，最勝の仏法を行いなさい。
依るならば，りっぱなラマに依りなさい。
今，このように成った事から考えなさい。

上方の善趣に生れることと解脱は白昼の星宿よりも稀で一つと，
下方の輪廻と悪趣は腿肉を外科手術するよりも広まっている（のが二つで)。
今，傷心し，色法と心法の分離するこの時に，

婆さんよ，死の味わいを確かめず悔ゆる女よ，
お前は考えを省みて，自分の心を調べなさい。
行うならば，最勝の仏法を行いなさい。
依るならば，りっぱなラマに依りなさい。

とおっしゃった。そして尊者の慈悲と教誡の妙なる歌によって老女はおのづから信心をおこしました。手の粉土もまた指の間から漏れて行きました。老女は以前にした諸行為を思いおこして，追悔しまして，涙が落ちていく時，畑にいた女の子が，主人のところの門が開いて，指導者その人が入って来ていたので，尊者に「ヨーガ行者よ，お前は，法にふさわしくなくこの老女を打った。それでこの打着の争いそのものは何であるのか」と言ったので，老女が言うには,「女の子よ，彼に争論を言うべきではない。彼が私を罵ったのではない。私が彼に争論をしかけたお返しに，一法（教え）を下さり，それら（のことばは）私の理解に及ばず，一つもわからなかったので，自分に失望して，追悔の心をおこして，教えを無用とした事を悔ゆること激しく，涙を禁じ得なかったのである。今，お前自身は，自分のようではない。その年齢は若さを享受していて，信仰を有っている。このラマはミラレパというその人である。彼に供養を捧げて，法と教誡をお伺いしなさい」と言った。その女子が言うには,「そのようであるならば，あなた方二人ともとてもすばらしい。私は拝顔した事自体で福徳を積みました。あなたが如法の人達にタントラの伝統をお説きになる事によって，弟子達は信心を増し，現象を転ずる教えであると言われます」と言い,「あなたの相伝，それをおっしゃって下さい」と言いましたので，尊者はその女子を福分のある女弟子とお考えになって，タントラの相承に到るその流儀を歌でおっしゃりました。

法身は一切に遍き普賢菩薩で第一で，
受用身は相好によって飾られた大金剛持で第二で，
化身は衆生利益をなさるシャカムニ仏で第三である。
相承者，それは三つを有っているヨーガ行者である。
相承者，それの三つを信ずる弟子の如き人がいるのか？

とおっしゃったので,「相承者はたいへんすばらしい。例えば，河水が雪山の頂に到達するようなものです。あなた，如法者には，外には，内心を表現するラマにより，内は，不生の法身を決定されている」と言われます。「あなた自身の根本のラマはどのようなラマに依止していますかおっしゃって下さい」と言いましたので，尊者は，私に，根本のラマはこの様であるとおっしゃり，りっぱなラマに依止するその仕方を歌で述べられました。

心識は外からの指示で，外のラマ，
心相續は内からの教示で，内のラマ，
道理の相續を心に教示するのは道理のラマ，
その三つのラマを有っているヨーガ行者があって，
その三つのラマを信心している弟子の如き人がいるのか？

とおっしゃったので，女の子が言うには,「そのラマは特に聖であり，金の秤の紐に緑松石をつないでいるようなものです。そのようなラマに法をお伺いする前に，灌頂をどのようにしますか」と伺ったのに答えて，以下の歌が述べられました。

瓶灌頂は総じて頭上に排列された外的灌頂，
自分の体が仏像と教示するのが内の灌頂，心そのものが自分と遇うのが事業の灌頂，
この三つの灌頂を有ったラマがあって，
この三つの灌頂をお願いしたい弟子の如き人はいるのか？

とおっしゃったので，また女の子が言うには,「灌頂は非常に甚深であります。例えば猛獣の王，獅子が爪で一切を威力によって制圧するようなものであります。今灌頂をお伺した後の智の道に入る場合に，事業（実際の導き）の論といわれるものがあるといわれていますが，導論をどのようにお伺いしたらよいか」ということの答として以下の歌が述べられました。

聞，思，修の三つを行うのが外的導論，
知が透徹しているのが内の導論，
集散なき証悟が本当の導論，
その三つの導論を有ったヨーガ行者があって，
その三つの導論を請問する弟子の如き者はいるのか？

とおっしゃいました。「その導論は清浄無垢な鏡に影像が映現するようなものです。導論を請問して，後で山中で修行して我執を切断する必要があります」と言い,「あなたは，我執を断ずるにはどのようにすべきか」と伺った事に対する答として，以下の歌が述べられました。

鬼神の住む土地，山中で修行するのが外の断，

体（蘊）に着けた袈裟を放捨するのが内の断，
だだひたすらに根本から探究するのが本当の断，
この三つの断を有ったヨーガ行者があって
その三つの断を請問する弟子の如き人はいるのか？

とおっしゃったので，女の子が言うには，「その断は，大鵬が空中を飛ぶと，より小さな鳥全部が調伏されるような非常に大きな不可思議である。ヨーガ行者が断をなすとき，悪縁を仏道に引導するときに，パー（phags）[4]といわれるものがあるといわれていますが，あなたがパーの大切な意味をおっしゃって下さい」と伺った事に対する答として，次の歌が述べられました。

散乱した分別心を収集するのが外のパー，
心の混濁を消散させるのが内のパー，
現狀を本性に安立するのが，本当のパー，
これら三種のパーを有っているヨーガ行者があって，
その三つのパーの宣説の弟子にふさわしい人がいるかな？

とおっしゃいましたので，女の子は，「そのパーは非常に稀有であって，大王の軍隊の法螺貝（の響き）や勅語のようで，真理を速やかに，大きく示すものです。そのように心のあり方を修行において感得する事は如何様でありますか」と伺ったので，その答として，次の歌が述べられました。

根本は作為なき，偉大な遍在（法性，空性）として現れる。道は不作為にして，（薬の）偉大な銅灰[5]に現れる。果は不作為にして，大印（Mahāmudrā）に現れる。
その三つの感得を有つヨーガ行者があって，
その三つの感得を成就する弟子の如き人はいるのか？

とおっしゃったので，女の子が言うには，「それらの感得は，雲のない大空に太陽が現れて一切の事象を明らかにする如き稀有で非常に偉大なことであります。その感得において，心のあり方を修行する事によって，どのような自信を得ますか」と伺うのに答えて，次の歌が述べられました。

4）坐禅中，修業の間，雑念を払うため用いられる呪文である。この語を発声して幻影や眠気を払うのは明から日本に伝わった発声の拈提と似ているように思われる。
5）薬を作るときに用うる，銅を焼いて灰にすること。タントラの一つの技法である。

神なき，鬼神なき見解の自信，
所縁なく，散乱なき修禅の自信，
希望的観測なき，疑惑なき果の自信，
その三つの自信を有ったヨーガ行者が居って，
その三つの自信を欲する弟子の如き人がいるのか？

とおっしゃいましたので，それからその女の子は非常に信じて帰命しました。おみ足を頭頂に拝受して，屋内の坐処に招じ入れて，種々の種類の大供養を差上げて，「ラマよ，私は以前には，無明によって覆われていて，仏法を思いませんでした。今，ラマよ，あなたの下僕として随従します。そして法を大悲心によって憶持することを請問し，自らの罪過を現わにして，法を請問するに際し，真実を次のように献じました。

ああ，ラマ，偉大な宝よ，
然して，最上の人，化身よ，私はわからずや，無知，散乱の三つで，
この世間には罪悪が多い事よ，
三夏[6] は南方の雲の力が大きいから，
太陽が現れるのを私は感受しませんでした。
三冬は寒さの力が大きかったので，
花が生ずるのを私は感受しませんでした。
悪い熏習が大量であったので，
あなたが得成就者であると私は知りませんでした。
私，女の子の物語りを話すならば，
悪業の力により悪身を受けました。
生れた処の悪い障碍に覆われて，
自分が仏であることを自ら感受せず，
努力せずに法を憶念しませんでした。
法をなすべきと思っても懈怠に過しました。
よい（体と富の）生れも，ままならず失せます。
弱い（女の）生れの場合には友を得ません。
恩のある母や父を捨て去ります。
夫に面と向って死や自殺を行わせます。
高みへの思い（野望）が大きくて，しんぼうが小さいのです。

6）夏，冬の三カ月間のこと，三冬も同じ。

多くの離間語において口先を競うことを心得ていました。
地方から人の口にのる事をかき集めました。
夫妻の中に門番の犬を必要とし，
食物や財を与えることを行っていても，
悪しき天性は吝嗇を特別に行いました。
無常と死が来ると思いませんでした。
罪障は身体の影のようについて来ます。
今，心から仏法を行います。
それで，私は容易に持し，容易な教えを一つお願い申し上げます。

とお伺いしたので，（尊者は）歓喜して，尊者は女子の請問に答えて次の歌を述べた。

ああ，ペータルブム（十万の吉祥が増大する女弟子）よ。
お前さん，女達のこの物語を，
讃えて言うならば，自恃を生じよう。
けなして言うなら，忿怒を生じよう。
道理を言うならば，罪悪をわき上らせよう。
今，老人である私の話を聞きなさい。

お前さんが，心から仏法を行おうとするなら，顔に出ているものを放捨するよりも，
心に出ているものを放捨するのがよろしい。
（世間的）価値ある欲求をごまかして捨てるよりも，低い地位を持つのがよろしい。
子供や夫の下女を捨てるよりも，りっぱなラマに依止するのがよろしい。
今生でなすべき事を捨てるよりも，後生の大事を成就するのが良い。
財宝を欲する吝嗇を捨てるよりも，無方に隔てなく布施をするのがよろしい。
それらの意義を知るならば，穏かである。
お前さん，凡夫の女と小鳥である雲雀は似ている。
舌は安楽で，仏法を貴ぶ。
お前さん，凡夫の女と森林の孔雀とは似ている。
優美な姿を知って，仏法を貴ぶ。
お前さん，凡夫の女と市場の商人は似ている。
活潑な衆生で，仏法を貴ぶ。
お前さんは仏法を如理に行おうと欲するなら，私に従い，私の様にしなさい。

教誡を心散乱せずに，山中で修行しなさい。

とおっしゃったので，またその女の子は，尊者にお伺いする事そのことを歌として献じました。

ああ，尊者，偉大な宝よ，
親愛な意義あるヨーガ行者よ，
私は日中，休まず仕事に関っています。
夜はたやすく昏睡して了います。
朝晩，衣食の下女として使われています。
仏法を行う暇はありません。

とお伺いしましたので，尊者は御口づから，
「お前は，仏法を正しく行おうとするならば，世間の行為は敵と心得て，背後に捨る必要がある」と女の子の請問の答として背後に捨てる次の四つを歌として述べられました。

ああ，ペータルブムよ，
信心ある生活と富を有つ人よ，
今生より後生へは長路である。
干した食糧の準備はよろしいのか，
干した食糧の準備に入っていないなら，布施する事に依って，放捨をも求めよ。
敵は吝嗇という門の犬と知れ。
その犬は利益を摑んでも害をする。
吝嗇が敵であると知っているのか，
知っているなら放捨して，止めて下さい。

ああ，ペータルブムよ，
今生より後生へは暗黒である。
灯火を準備し了えているのか，
灯火を準備していないならば，
光り輝いているものより修行を更に求めなさい。
敵は暗黒という臥した屍[7]ような人と知りなさい。

7）人を罵ることばで，起き得ず屍のようだという言い方である。俗語。

彼は利益を把握しても害をも与える。
暗黒が敵であると知っているのか。

ああ，ペータルブムよ。
今生より後生へは怕さが大きい。
護送者を準備しているのか，
護送者を準備していないのなら，
仏法の実在より実習を更にまた求めよ。
敵は近親という（法への接近を）遅延せしめる者と知りなさい。
これは利益を摑んでも害をする。
近親が敵であることを知っているのか，
知っているのなら，後に捨てて止めて了いなさい。

ああ，ペータルブムよ，
今生より他生へは遠い険しい路である。
雄馬を準備しているのか，
雄馬を準備していないなら，
精進して更に完成を求めよ。
敵は懶惰と言う惑わしであると気をつけよ。
これは利益を把握しても害をする。
懶惰が敵であると知っているのか，
知っているなら，放棄し，止めなさい。

とおっしゃったので，更にまたその女の子が言うには,「ラマよ，後生のためのどんな準備をも準備していません。今準備を始めますから，修禅の導きを慈悲によって施すことをお願いします」と心からお願いしましたので，尊者は非常に歓喜して,「お前が，心から仏法を行ずるなら，私の流儀では，名前を変更することも必要でない。髪をもっていた時より以降仏教徒であるから，髪を切ることと衣を代えることも不必要である」とおっしゃった。修禅の導きである心の修法を譬える四つの意味と五つの以下の歌をおっしゃった。

ああ，ペータルブムよ，
然らば，富と信心を有つ女よ。
お前はこの虚空に，譬を立てて，

辺と中央のない修禅を行いなさい。

日月の二つを譬として立てて，
明暗なき修禅を行いない。

この山を譬として立てて，
不変と変化とのない修禅を行いなさい。

大海を譬として立てて，
上下なき修禅を行いなさい。

自心を対象にして，
競走と疑いのない修禅を行いなさい。

とおっしゃって，体に関する要点と心に関する要点の諸々を教えました。修禅に入ってから，その女の子に良い証悟が生じ，疑惑と障碍を清除するために，質問の理由を次のように申し上げました。

ああ，尊者，偉大なる宝よ，
ああ，最勝の生，化身よ，

私は虚空の禅定において安楽でありましたが，
南方の雲の禅定は少しばかり良く出来ません。
今，南方の雲の禅定の教誡をお伺いします。

日月の禅定において安楽であっても，
七曜や星宿の禅定は少しばかり良く出来ません。
今，七曜と星宿の教誡をお伺いします。

大山の禅定において安楽で，
草木の禅定は少しばかり良く出来ません。
今，草木の禅定の教誡をお伺い致します。

大海の禅定に安楽であっても，
波の禅定は少しばかり良く出来ません。
今，波の禅定の教誡をお伺い致します。

自心の禅定において安楽であっても，
分別の禅定は少しばかり良く出来ません。
今，分別の禅定の口伝をお伺いします。

と言ったので，尊者も亦禅定を生じている修禅はミラレパ自身の心を非常に喜ばし，女の子の請問の答として，障碍を取り除く即効の次の歌を述べられました。

おお，ペータルブムよ，
聞きなさい。
富んで信心ある女よ。

虚空の禅定において安楽であるならば，
南方の雲は虚空の神変である。
虚空自体のそのままにおいて下さい。

日月の禅定において安楽であるならば，
七曜，星宿は日月の神変です。
日月自体のそのままにおいて下さい。

大山の禅定において安楽であるなら，
草木は大山の神変です。
大山自体のそのままにしておいて下さい。

大海の禅定において安楽であるなら，
波は大海の神変です。
大海自体のそのままにしておいて下さい。

自心の禅定において安楽であるなら，
分別心は心の神変です。

心性自体のそのままにしておいて下さい。

とおっしゃったので，(女の子は) 禅定を行って，心は法性のあり方であると決択して，その後，この体そのものが，楽器の音を伴って，天空の行にと去って行かれました。

尊者の弟子達の中の四人の女弟子から，ツュンのゲーパーレの三つにおけるニャマ，ペータルブム（十万の吉祥の増大した女弟子）と逢った章，終り[補注)]。

補註) rDzong rtse byams pa thub bstan 師によると，チベットの尼僧院には男僧と同様な論部の学習カリキュラムは存在しなかったがその例外がある。Jo nang pa の有名な Tāranātha (1575—1634) の建立した rTag brtan phun tshogs glin 僧院には尼僧院もあり，そこでは Jo nang pa の特徴的な哲学説，他空 (gshan stong) 説の論典が毎日読誦されていた。内容の理解は然し問題とされなかった。だがこの事は他の派には全く見られなかった。この事はダライラマの系統のゲールクパが異端説と目してこの僧院を乗取り，ゲールクパの僧院，尼僧院とした後も行われ，ゲールクパの尼僧達が他空説を誦していた。勿論，更に論部の学習カリキュラムはなかった。1959年の中国軍のチベット侵入以後，インドのダルムサーラの尼僧院で論部の学習が可能になった。尼と女性に対する制約としての戒律を理由とされるが，ミラレパの様な得成就者 (Siddhi) にはこの制約はなかった。これらは別途に論ずる事としたい。